

受付番号

留学・研究計画書

氏名 日高 俊	留学機関名 Library of Tibetan Works and Archives (LTWA)
留学先国名 インド	留学期間 西暦 2009年3月～2010年3月
研究テーマ ダライラマ13世時代(1876-1933)のチベット史研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>2007年3月、チベット自治区においてチベット人の暴動が発生し、それに対して中国政府が武力弾圧を行った。この弾圧に対する抗議運動の世界的な広がりや、「民族問題」・「人権問題」としての「チベット問題」の重要性を示している。この重要な問題を平和的に解決するにおいて、その歴史的根源を遡る必要があるのは言うまでもない。</p> <p>「チベット問題」の根源を遡るにおいて重要な時代の一つが、ダライラマ13世時代である。この時代以前、チベットは、清朝と仏教を基とした緩やかな関係を結んでその軍事的庇護下に入り、両者の関係も基本的には安定していた。しかし、この時代に西洋発の「近代化」の波がチベットに及んだ結果、その関係は破綻した。この時に生まれた両民族の断絶は、中国が民国から人民共和国へと移り変わり、人民解放軍によってチベットが「解放」された現在でも続いている。</p> <p>この時代には「チベット問題」の根源とも言える重要な事件が幾つかあるが、中でも特筆すべきなのがダライラマの2度に渡る亡命である。この内1度目は、チベットとの通商を求めるヤングハズバンド率いるイギリス武装使節団のラサ入り(1904年)に対して外モンゴルへと北行したものである。この事件はチベットの受けた初めての「西洋の衝撃」であるが、「チベット問題」の根源を探るにおいては2度目の亡命のほうがより重要である。これは、アヘン戦争以来の列強の植民地化に対抗して、「近代化」を進めた清朝が、チベットの統治を強めようとして起こした仏教弾圧の結果、1909年に帰還していたダライラマが翌1910年に英領インドへと亡命した事件である。この亡命は辛亥革命後の混乱に乗じたチベット側の蜂起により、駐チベットの中国軍が敗北して追放された結果、ダライラマが帰還した1913年まで続いた。帰還後ダライラマは、軍隊の改革など「近代国家」化を進め領土を巡って中国側との武装衝突を繰り返した。</p> <p>このように重要な期間であるにもかかわらず、その先行研究は殆どなされていない。その研究もチベット史でありながら、漢語史料・英語史料をもとにして書かれたものが中心を占める状況である。これまで私は、この状況を解決するため、数少ない公刊されたチベット語史料であるダライラマ13世全集所収の史料を用いて特に2度目の亡命期を中心に研究を行ってきた。しかし、その史料も限られたものであり、研究の継続のためには、未公刊の「解放」以前のチベット政府(ダライラマ政庁)の公文書を用いる必要がある。そこで私は、インド・ダラムサラのチベット亡命政府の文書館である Library of Tibetan Works and Archives に留学して、そこに所蔵されている公文書をもとにダライラマ13世時代のチベット史の研究を行い、この時期から悪化したチベット・中国関係解決の糸口を探りたい。</p>	

成果報告書

記入日 2010年 4月 7日

氏名 日高 俊	留学先国名 インド	所属機関 Library of Tibetan Works and Archives (LTWA)
研究テーマ：ダライラマ 13 世時代 (1876-1933) のチベット史研究		
留学期間： 2009 年 4 月 ~ 2010 年 3 月		
<p>1. 史料面での成果</p> <p>ダラムサラへの留学に当たり、第一目標としたのは、特にダライラマ 13 世時代を中心とするチベット語史料群の入手であった。この点においては、1 年間の留学中に LTWA に所蔵された公文書、新聞類を中心として、多くの史料の写しなどを得る機会を得ることができた。</p> <p>これらの史料のうち、公文書類は日本では殆ど紹介されていない。欧米でもインターネット上などによる公開などこそ始められこそすれ、これらを用いた研究は殆どなされていない状況である。新聞類についても日本には存在せず、世界的に見ても紹介が始まった程度である。これらの日本への招来と紹介は日本のチベット学に大きな意味を持ちうるものといえよう。これらについて以下に概略を述べる。</p> <p>1-1. 公文書類</p> <p>公文書類については、LTWA 所蔵分の公文書類のデジタルデータを入手した。これらは数量的には 900 種類、年代的には 15 世紀から 1959 年までを中心として広範囲に及ぶものである。これらの資料は、ダライラマ政庁の各省庁から各地方、寺院に送られた手紙、命令文を中心に、書籍やパンフレット類もある。形態も紙製、軸装など多種多様であり、一部、モンゴルなどに所蔵されている文書のコピーも含まれている。</p> <p>この内ダライラマ 13 世時代に発行されたものは、全体の 5 分の 1 に当たる 170 種ほどであり、外交文書、徴税文書などを含んでおり、13 世自身の手紙類もある。</p> <p>これらの史料中で興味深いのが、1913 年~14 年に、インド、シムラで行われたチベット、中華民国、イギリス 3 者会議に関するチベット側の史料集 <i>shing stag rgya gar 'phags pa'i yul du dbyin bod rgya gsum ching mol mdzad lugs kun gsal me long bzhugs so//</i> である。シムラ会議は清朝崩壊後のチベットと中国側の対立状態を解決するためにイギリスが仲介となって行われたものである。この会議ではチベット側の「独立」、領土主張と、中国側のチベット全土への領有主張が激しく衝突し、中国のチベットへの「宗主権」認定などを含むイギリスの仲介案もむなしく、最終的に決裂に終わっている。</p> <p>このようにこの会議はチベット問題の歴史にとっても一つの転換点といえる事件であるが、それに関する英語史料、漢語史料は出版されていたものの、その一方の当事者であるチベット側史料はこれまで公刊されていなかった。この史料集はチベット側の全権代表シェーダが纏めたものであり、その史料的価値は極めて高いといえる。</p> <p>この史料内において特筆すべきなのが、ダライラマ政庁によって作成された清朝軍によるチベットへの被害目録が含まれていることである。その中では従来ダライラマ政庁の政治的統治下にはなかったアムド（現在の青海省のほぼ全域）、カム東部（四川省西部）の寺院などでの損害も「チ</p>		

ベットの損害」として賠償が求められている。このことはシムラ会議時点で、ダライラマ政庁側がこれらの地域を自らの「領土」として認識していたことを指し示すものである。またこれは、ダライラマ政庁側の「領土」意識形成が、清朝（中国）側の寺院破壊への対抗という側面をもっていた可能性を提示するものでもあろう。

1-2.新聞類

新聞類については、1925年から1963年までインド・カリンポンで発行されたチベット語新聞 *gsar 'gyur me long*、及び人民解放軍のラサ占領後にラサ、ギャンツェにて発行された新聞類の LTWA 所蔵分の写しも入手した。

このうち、全体の大部分をしめる *gsar 'gyur me long* は、インドにおいて発行されていたこともあり、その初期はチベット内の状況について情報量が少ないことは否めない。しかしその問題も年が進むにつれて解消され、特に 1951 年以降の中国占領下チベットの状況については、多くの亡命チベット人がカリンポンに流入したこともあり詳しく記述されている。記事中に写真、イラストも多く用いられており、これらも史料として有用なものである。

また、この新聞中において、チベットにおいて最初に近代的方法論を用いた学者とされるゲンドゥンチュールペルの論文も発見された。彼については国内においても研究がされており、これらに資するものとなるだろう。

加えて、『ラサ望郷歌 (*lha sa dran glu*)』の連載も発見した。この歌は清朝軍のラサ侵入によって、ダライラマ 13 世とともにインドへ亡命していた当時の書記官シェーカルリンパが 1911 年に書いたものである。

この歌では、亡命中という状況下で書かれたにも拘らず、その原因となった清朝軍に対する攻撃的表現が少なく、チベット人の仏教に基づいた平和志向が表れているものとして以前より筆者が注目していたものである。この発見により、この歌が当時のチベットに広く受け入れられていたことが再確認されたといえよう。

1-3. その他の書籍類

公文書類、新聞類のコピーに加え、昨今ダラムサラにおいて出版されている文献も多数収集した。これらの内容はチベット語、英語及び漢語など諸言語によって、歴史、政治、語学など各分野に及んでいる。

その中でも特筆すべきなのは近年多く発行されているチベット人による自伝、伝記類である。特に図書館出版のオーラルヒストリーシリーズには旧チベット政府高官による報告なども含まれている。これらはその使用に当たって検証は必要であろうが、近現代史に関する史料として重要なものである。

これらのインド出版チベット語文献類についても、現在まで日本の研究においては比較的紹介、使用がほとんどされていない。従ってこれらの招来も今後の研究において一定の意味を持つものといえる。

2. 言語面での成果および研究者との交流

言語面の成果については、LTWA のチベット語の言語クラスに約 9 ヶ月間参加することによって、特に会話面を中心に進歩が見られた。ここで得られた言語能力は今後のチベット人との交流などにおいても有用なものであろう。

また、LTWA の人々を中心に、ダラムサラの私設研究所アニマチェン研究所などの研究者とも知己を得た。特に図書館の人々とは所蔵史料の同定の手伝いなどを通じて、深い信頼関係を持つことができたと思われる。今後はこの交流をもとに、インド在住チベット人研究者の日本招請なども行えると思われる。

3. 亡命チベット人社会の現状

ダラムサラに1年弱滞在したことにより、現在の亡命チベット人のおかれた状況についても幾らかの知識を得ることが出来た。

その中でも近代史とも関係が深いと思われるのが、亡命チベット人内におけるナショナリズム興起の動きである。特に興味深いのがそのナショナリズムの「範囲」である。従来、亡命チベット政府は現在のチベット自治区のみならず、青海省のほぼ全域、甘粛省の一部、四川省東部、雲南省北東部まで含めた、伝統的にチオルカスムと呼ばれる地域全体をチベット人の住む「領域」と主張してきた。

しかし、近年において、「ヒマラヤ民族」という概念が新たに生み出され始めている。これはチオルカスムに加えて、ブータン、インド領アルナーチャルプラデーシュ州、シッキム州、ジャンムー&カシュミール州ラダック、ヒマーチャルプラデーシュ州スピティ、キンノウルなどヒマラヤ周辺の地域をヒマラヤ地域とし、そこに住むチベット文化を持つ集団を「民族」として定義付けたもので、広義ではネパールも含まれることがある。

ダラムサラで発行されているチベット語新聞 *bod kyi bang chen* において「ヒマラヤ民族の一部」としてスピティ史の連載がされるなど、亡命チベット人社会においてこの概念に対する認識は深まっている。しかし、これは後に大きな問題を生む可能性を秘めたものである。そのことは、LTWA 発行のチベット語雑誌 *gtam tshogs* の28-2号所収の *sgo dmar sangs rgyas bkra shis* による論文 "hi ma la ya'i spyi skad" によく示されている。

論文では、ヒマラヤ民族内における口語統一の重要性が論じられている。この統一された口語が何を基とするかは文中では明示されていないが、文意から最も基本的なチベット語であるラサ方言を指していると思われる。その上で論中では、チベット系ではあるが独自の口語ゾンカ語を「国語」としているブータンに対しても、統一されるであろう「ヒマラヤ語」の利用を推奨している。

これはともすれば「国語」として、異民族に自言語を強制する行為へと繋がるものである。いうまでもなく、チベットには現在、それを強制する軍事力どころか国家さえもない。またそもそも統一された「ヒマラヤ語」もまたその作成がようやく始められた状態に過ぎず、この懸念が表面化する可能性は無きに等しい。しかし概念レベルのみにおいてもこのような動きが出ていることは、注視すべき事例であろう。

このような「民族の形成」がなされる一方、ダラムサラでは「民族」の壁を超越してあらわれる世界宗教としてのチベット仏教の姿も目の当たりに出来る。それは、一見すればチベット「民族」にとって敵対者とも思える台湾人、華僑、華人などの「中国人」がチベット仏教の施主として大きな位置を占め始めていることに端的に示される。例えば2009年には、台湾と、シンガポールなどに在住する華人の仏教会が施主となるダライラマ法王の法話が1回ずつ行われた。また、ダラムサラ近郊のチベット仏教の寺院には漢語で書かれた寄付箱も置かれているのである。

以上のように現在の亡命チベット人社会は、強固である故に排他的でもある「民族」意識と、より曖昧であるが上に柔軟な「仏教」が現在並立している状況にあるといえる。このような並立の実態がどのようなものであり、今後どのように進展していくのかは、チベット問題の将来などを考えるにおいても興味深いテーマたりえると思われる。今回、その現場を目の当たりにできたことは貴重な体験となるだろう。また、両者の並立は13世時代にも見られ、論者が主要な論点としている事象である。従って、この体験は今後論者の近代史研究にも役立つとなると考えられる。

留学全体の感想

留学先においては、2009年4月から12月までLTWAの開講する外国人向けのチベット言語語クラスに所属し、併せて2009年4月から3月まで研究員として史料調査を行った。滞在期間中には、ダラムサラ近郊の亡命チベット人の入植地などに度々出向いたほか、チベット文化圏の一部であるスピティも訪問した。また、2010年1月にはビザ再取得を兼ねて、ネパール、カトマンズの亡命チベット人街にも滞在し、その後、インド中南部にも旅行を行った。

図書館においては、史料閲覧に対する制限も少なく、公文書史料なども比較的容易に実見、コピーできた。図書館の職員の人々も気さくで楽しい人々ばかりだった。史料の閲覧のみならず、ネパールでの滞在先の紹介にも便宜を図って頂いたソナムトプギェル氏のほか、トゥプテンプンツォ氏など図書館司書の人々、及びチョクドルジェ氏、アニノルゾム氏、ニマデキー氏といった言語クラスの教師方には非常に世話になった。

ダラムサラは街の規模こそ小さいものの、その中心通りが「世界で最もコスモポリタンな通り」とも称されるほど世界中から多種多様な人々が集まる場所であり、言語クラスの級友もアジア及び欧米諸国から、南米のチリ、ブラジルまで様々な地域の人々がいた。授業などを通じてこれら多くの国々の人々と交流できたのは楽しい経験であったし、これらの人々を引きつけるチベット仏教及びチベット文化の魅力も再確認出来た。

日常生活については、まず食事面では、世界各国から来る旅行者、滞在者のニーズに併せてか、街には西洋料理から中華料理、日本料理に至るまで、各国料理のレストランも存在しており、選択に困ることはなかった。

気候面についても、ダラムサラ自体、温暖湿潤で四季もある日本を少々暑くしたような気候であり、生活しやすい場所であった。また、2009年にはモンスーン前線の停滞により、インドのほぼ全域が雨不足に襲われたが、ダラムサラではある程度の雨量が確保できたとしく、少なくとも滞在期間中に水不足が顕在化することはなかった。またインドでも問題となっている大気汚染も、ダラムサラは丘の街であるのでそれほど酷くはなく、喘息などになることもなかった。

ダラムサラに住む亡命チベット人たちは、亡命を経験しているとは思えないほど、明るく冗談好きな人々であり、またとても親切で、色々なことで助けられた。もともとの現地人である山岳民族ガッディの人々とも触れ合う機会があったが、彼らも素朴かつ誠実な人々であった。そのため人間関係のトラブルに巻き込まれることもなく、気持良く1年間の滞在を送ることが出来た。

総じて、ダラムサラにおける1年間の留學生活は非常に有意義なものであったといえる。このような機会を与えて下さった松下国際財団に感謝の意を示したい。本当に有難うございました。